東九州支部報

第１００号
記念号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2023年１月25日（水）発行

２０２２　日本山岳会東九州支部忘年会（2022.12.10：NBU湯布院研修センター）

もくじ

１．100号特別投稿		JAC支部ユース交流会 in 広島2022	１５
東九州支部報 100号	２	３．個人投稿	
100号と百山	２	ペンリレー・第４５回 カトマンズの病院で（平成26年10月初旬）	１７
思い出（自然保護活動について）	３		
木馬道の思い出	５	より安全な登山のために No.47	１８
月例山行　姫島	７	より安全な登山のために　No.1～No.47まで	１８
２．支部活動		私の無名山ガイドブック（No.87）	１９
10月　喜寿登山　高崎山	７	登山会報リバイバル（第２回）	２０
10月　月例山行　中山仙境・堂明	８	11月の群馬県の山々	２１
第38回 宮崎ウェストン祭	９	奈良・大阪の山々	２２
忘年登山および忘年会	１０	４．支部からの報告	
第９期 登山入門教室実践講座（11月）	１２	支部連絡会議	２４
第９期 登山入門教室実践講座（１月）	１２	会務報告	２６
中級者登山研修会　積雪期　伯耆大山	１３	後記	２８

１．100号特別投稿

東九州支部報　100号

（会員　9193　安東桂三）

約25年前のことを思い出しながら、支部報について少し書こうと思う。当時、支部長は、３代目の故梅木秀徳氏（会員番号5908）。梅木氏は、当時、何とか支部報を発行しようと役員にはっぱをかけていた。そこで役員の飯田勝之会員（会員番号10912）が、一度作ってみましょうと始めたのが、「東九州支部報」であり、創刊は平成10年11月20日のことである。当初は不定期であったが、星子貞夫会員（会員番号8582）の、支部報は定期的に発行するべきだとの意見により、四季報となったのは平成12年で、以後、四季報として継続している。

創刊号に、梅木氏は、支部報を発行できるようになったのは嬉しい限りと述べ、支部会員相互の意思疎通、情報交換の場が必要で新しい支部報が十分役立つと、述べた。

創刊号には、星子会員のワスカラン、コトパクシ、チンボラッソの登頂記録が掲載され、2号にも、星子会員のシシャパンマ記録が掲載。以後、多くの会員のヨーロッパアルプスや、ネパールトレッキングやエクスペディションの報告、九州・大分の山々の登山記録が掲載された。

十年一昔と言うが、約25年間で二昔半となり、創刊号の表紙を飾った支部メンバーの19名は、亡くなったり退会したり、現在の支部には、昔の写真で判別しにくいが、３名ほどと思う。支部会員の平均年齢は、ある時期、全国支部の中で一番若い時期もあったが、現在では若い会員の退会と構成会員の高齢化で、70歳ほどとなった。

支部報の内容は、その支部報が発行された当時の活動を反映しているが、25年前の活動と比べると、現在では公益的事業の山行、研修などが紙面の多くを飾り、25年前にはなかった支部会友制度による山行記録も多い。記事が多いことは良いことと思う。100号となった支部報は「継続は力」の象徴であり、今後も継続を望む。ただ、情報化の世界になり、支部報の記事の一部は他の媒体に移し、研究や、推論や、山談義、オピニオンなど、奥深い支部活動の報告の場、課題提供の場としたい。それが会員の安全登山、支部の発展存続へとつながると思う。

100号と百山

（会員　8765　加藤英彦）

ここに東九州支部報の創刊号から99号までが箱におさめられている。持って見るとずっしりと重い。それもそのはずである。東九州支部の今日までの業績が蓄積された汗と涙の結晶であり、今、一つ一つ読み返してみるとおもしろい大変貴重な物となっている。

創刊号は1998年（平成10年）11月20日発行、表紙は白黒の写真で、平成９年１月26日の日付で熊本県の筒ヶ岳山頂直下のハシゴを前にして19名の会員が写っている。今はその19名も亡くなったり会を去っていったりと25年間の歳月を感じる。その筒ヶ岳の山行がどのような山行であったかは支部報には記録がない。

創刊より毎年４回：25年間支部報は継続して発行されてきており次号が記念すべき100号という事になる。まさに東九州支部の歴史を物語るものでありずっしりと重たいはずである。

支部はその25年の間、創立40年、50年、60年と節目に記念行事を開催してきている。

創刊（平成10年）当時は支部長、梅木秀徳、事務局、西孝子さん、会報発行責任者は飯田勝之さんという体制であった。

平成23年４月の総会において梅木支部長が退任し、私が支部長に就任、支部報53号：平成23年４月25日発行において「支部長交代に当って」という挨拶の掲載がある。事務局は飯田勝之さんに交代、会報担当は引き続き飯田勝之さんという体制をとった。

そして令和３年４月の総会において現体制の安東桂三支部長、阿南寿範事務局長への交代、支部

報担当者は阿南会員へ、そして今回の99号より河野達也会員へと交代している。

創刊号において梅木支部長は「・・・東九州支部も会報の発行にこぎつけることが出来て全国の仲間入りを果たしたことになります。それだけの力がついてきたと自負しても良さそうです。」と、そして「支部会員相互の意思疎通と言いますか共同行動のための情報交換の場が必要となってきます。新しい支部報がそのため十分役立ってくれるものと信じています。」と述べている。

まさにその精神で支部報が創刊以来続いている事であります。支部報が継続されて発行されているのはそれに携わってきた担当者のたゆまない努力の賜であり、その仕事には心から敬意を表するものである。

さて、「支部報100号」というと同じ「百」という数字から東九州支部のオリジナルな「大分百山」についてふれてみたい。

左から　支部報創刊号　　真ん中53号　　右端99号

大分県下の山を収録した「大分百山」の歴史をふり返ってみるとその最初は支部20周年記念誌（1980年５月発行）《おおいた100山》として発表されている。単行本として1991年１月に「大分百山」初版本発行、2002年４月に改訂版「大分百山」発行、そして2020年11月支部60周年記念に「新大分百山」として発行された歴史がある。

私は2003年２月に大将陣山に登り大分百山を完登し、それから大分百山の魅力に取りつかれて以来、今年2023年２月25日迄に丁度50名の山友の大分百山完登者のサポートをしてきている。

それほどまでに百という数字は縁起のいい数字で取りつかれると自分でも何とかして大分百山を完登したいというふしぎな力が湧いてきて、次から次へと完登者が生まれている。

ふるさとの山・大分百山を登ることによって山の魅力に取りつかれ大分県内の様々な所を訪ねることで県内を知ることになるし、そしてしっかりとした行動は地図を読むことにもつながって今後もそういった意味で大分百山の完登をめざす方が出てくる事を期待したい。

そしてこれだけは言える。支部報100号も新大分百山の完登をめざす事もあくまで通過点であり、次の200号へ向けてそしてさらなる高嶺への挑戦として継続して向かっていきたいものである。

創立20周年記念誌

大分百山(初版本)

大分百山(改訂版)

新大分百山

思い出（自然保護活動について）

（会員　8595　首藤宏史）

自然保護に取り組み始めたのは、昭和46年、山として初めて感銘を受けた傾山の西側どうかい谷から山手本谷、つまり三ッ尾から三坊主、二坊

主にかけての下側の自然林（原生林）が皆伐され、見るも哀れな姿になっており、林道建設も土砂を谷側に垂れ流すずさんな工事で、このまま伐採が進むと大変なことになるとの思いからでした。梅木さんや甲斐さんはじめ岳連の仲間や生物関係の皆さんをはじめ関心を持ってくれた方々と「祖母・傾の原生林を守る会」を結成し、祖母・傾山系の自然林（原生林）伐採中止と自然林保護の活動に取り組むことになりました。

以前から自然林（原生林）の伐採が行われていたが、人力に頼る遅いペースで足場の良い場所でしたし、その状況もあまり人目に触れることもなく、気にしていませんでしたし、人々の自然保護についての関心もあまりありませんでした。ところが、昭和40年代になって、伐採機材の進化で、自然林が瞬く間に伐採されるようになり、前述のような哀れな状況になりました。

それから現地調査をしたり、原生林の伐採反対の署名活動。営林署、営林局、環境庁、林野庁に陳情するなどの活動を続けましたし、大分合同新聞も大きく取り上げてくれました。さらに、原生林の大切さを知って頂くことも必要だと言うことで、昭和48年学者の方々や県にお願いし「祖母・傾山系の林道開発と原生林伐採に伴う緊急な自然保護」（２枚の写真は表紙に用いた伐採現場の写真と羽田野二男、首藤が調査して作成した祖母・傾山国定公園植生概念図）という冊子を作り、関係者に配布したりしてアピールしました。このころ宮崎県大崩山系の原生林保護、鹿児島県屋久島の屋久杉の保護運動も行われていましたし、新聞各紙も取り上げてくれるようになり、少しずつ県民に理解が広がって行ったと思います。さらに対県交渉を続け、昭和49年には県議会に請願書を出しましたが、不採択になりました。が、自然を守る会山岳部会の請願書は継続審議となりましたし、自然林（原生林）伐採中止の運動は続けました。

一方、祖母・傾山系、くじゅう山系や由布・鶴見山系などにごみ投棄も多く、山の清掃も必要だということで、昭和52年から清掃活動も始めました。岳連会員やボランティアの方々と、久住山山頂付近の崖下には沢山のごみが投げ捨てられ、大きなごみ袋に何十袋もザイルを使って引き上げ、長者原に担ぎ降ろしたり、坊ガツル一帯を大々的に掃除し、ごみを長者原に担ぎ降ろすなどの活動や啓発活動を10年近く続けていくうちに、一般登山者にも理解が進み、ごみを持ち帰ってくれるようになりました。

昭和55年祖母山系の大障子17林班の伐採問題が起こり、現地調査をしたり、祖母・傾の原生林保護の請願書を県議会に請願書を出したり、交渉したりしているうちに、世論の理解も進み原生林伐採にもブレーキがかかるようになり、一定の成果が得られたと思っています。

昭和59年くじゅう山系黒岳の男池から奥一帯にかけ、ケヤキを中心にした自然林（原生林）の大木が伐採されそうになり、岳連の仲間と伐採候補木の一本一本を調査し、地元庄内町阿蘇野の方々と連携を取りながら、伐採中止の運動を進めました。営林署へ陳情書提出、黒岳原生林保護の請願書を県議会に提出、同時に県知事や環境庁、林野庁に要望書を提出しました。この頃になると自然保護の大切さが理解されるようになり、県議会で請願が採択されるなどして、黒岳の自然林（原生林）は伐採されることなく守られることになりました。

三ッ尾から三坊主、二坊主にかけての自然林皆伐　S46頃

羽田野、首藤が作成した祖母・傾国定公園植生概念図　S48作成

近年、スズタケが枯れ、ブナの立ち枯れも目立ち、アケボノツツジやヒメコマツ（五葉松）も少なくなりました。尾根一帯に枯れ木が目立ち、勢いがなくなった感じです。天然記念物のニホンカモシカも山頂付近からいなくなり、山麓近くで見かけたり、個体数も減っているようです。また、川の水量も減り、川魚も極端に少なくなりました。山域全体で自然の豊かさが無くなりつつあり、先々が思いやられます。

昭和41年５月　大崩山荘にて

木馬道の思い出

（会員　10912　飯田勝之）

木馬と書いてきうまと読むのだが、私がそれを初めて見た宮崎県北川村ではきんまと呼んでいた。私は21歳の時（昭和39年）から４年間ほど、宮崎県最北端の北川村下赤にある北川発電所に電気のエンジニアとして勤務していたことがある。当時の大分県電気局（現企業局）の発電所である。傾山や三国峠を源流とする北川にダムを造って発電するという北川総合開発事業は、昭和33年に着工され、最初に藤河内渓谷下流に小型ダムとその下流に桑原発電所を造って、その電力をもとに大分県初の大型アーチ式ダムを建設、その下流に25,000KWの発電所を建設という５年の歳月をかけて行われた事業であったが、私は発電所の竣工２年目にそこの配属となった。ダムは大分県内にあるが発電所は宮崎県にあり、今は遠方監視で無人化されているが、その頃は発電所に約30名の職員がいて３交代勤務や発電設備の維持管理などにあたっていたので、十数軒の官舎と単身赴任者・独身者用の寮があり、独身であった私もその寮で生活して交代勤務などについていた。

当時の北川発電所と上流のダムや桑原発電所を結ぶ道はトラックやジープが通れるが、路面にはトロッコのレールがあちこち残されていた。その道は国道３２６号となって今はすっかり様変わりして大分～延岡間の最短距離である。

寮には常に10名以上の独身者がいて、若い連中は仕事以外の時には、麻雀や花札、トランプ、囲碁・将棋、そしてお酒・・・・、うら淋しい谷間の夜に物足らずにしょっちゅう延岡に遊びに出かけていた。

それでも若いエネルギーは我慢していない。私は暇があったら野山を駆け回り歩き回った。発電所の窓から見ると桑原山の山頂が目の前に高くそびえている。黒原峠を超えれば祝子川の谷で、大崩山や鬼ノ目山がある。桑原川の谷沿いに行けば藤河内渓谷や木山内岳、夏木山・・。付近の山道をたどれば梓峠や、黒原峠、長野峠・・・、谷を遡れば黒内谷、つつじ谷、清蔵谷、椎葉谷、香花谷・・・。

３交代勤務は４日に一度全日休みとなる。桑原山、大崩山が私には一番のゲレンデで、古い壊れかけた大崩山荘が定宿だった。時には延岡近郊の山にも登ったが、中でも行縢山や可愛岳は気に入って、ことにこの二山の日向灘からの雄大な初日の出の光景は忘れられない。

こうした野山歩きはたいてい一人だったが、時には発電所の仲間を誘ったりした。中でも祖母・傾や霧立越・向霧立越の縦走、あるいは九重の冬山などに付き合ってくれたY君は、地元下赤の出身なので、地理に詳しくて度々付き合ってくれた。

そんな中で付近の山道に入るとよく目にしたのは、まるで階段状に横木が並べられている光景である。不思議に思って地元の人に聞いたら、それは「木馬道（きんまみち）」だと言って教えてくれた。木こりが材木を引き出す時に使ったもので、木こりに限らずほとんどの民家で、焚き木や薪や炭などの荷物を山から積み出す時にこの木馬に乗せて木馬道を滑らせて下ったとのことだ。その頃はもうあちこちに林道が開かれてほとんど使われなくなってい

たが、たいていの民家の母屋や納屋の軒下には、下側に黒くコールタールとグリースのようなものを塗った木馬がぶら下がっていた。

１ｍ弱の丸太を、急傾斜地にはやや深めに、緩傾斜や平らな所は半分ほど土に埋め込んで、見た目にはレールのないトロッコ道のようであった。その頃にはもうほとんど使われなくなっていたので手入れもされず、横木は朽ちたり無くなっているところが多かったが、残っているところは登り下りに、それが良かったり悪かったりしたものだ。踏みしめて登るのに助かったり、足の歩幅が合わなかったり、雪の後や霜の下りた朝などはよく滑ったりで手を焼いたものだ。

ある思い出がある。私は例によって早春のある日、ぶらりと山道歩きを思い立ち、祝子川に通じる黒原峠に登り、のどかな峠の風情を見ながら長野峠へと歩き、下赤の神社へと下っていたら、里近くなった山道に女性が木馬に焚き木を積んで下っていた。女性は私を見てにっこり会釈をした。彼女は里のある家の若妻で、その美貌は発電所の男たちの間でもいつも話題に上る人だった。歳は私より７～８歳は上の人であったと思う。彼女は私を見てすぐに発電所の若者と分かり、親しげに会釈したのだ。私も多少恥ずかし気に応じたと思う。

私は図らずも彼女と一緒に木馬を押しながら坂を下ることになり、道々いろいろ談笑したが、私がこうしてさしたる目的もなく野山をうろついている話をしたら、好奇な目で聞いていた。この里で生まれ育った彼女には不思議な行動であったらしい。私は女性が木馬を使っていたことに驚き、そのことを尋ねたら、風呂や竈に使う焚き物を取りに来たが、傾斜の緩いこんなところでは束を担ぐより楽。しかしこの上の坂には引いて行けないという。彼女の説明では木馬で木材を運ぶには男でも慣れないと大変で、上手に使わないとケガをしたり、時には命まで危ないことになるという話だった。

彼女が言うのには、ダムと発電所の建設工事が進められていた数年間は。工事事務所や飯場が幾つも立ち並び、工事に携わる人達と、それを目当てに出入りする商売人達、食堂や居酒屋や商店、散髪店などが立ち並び、街からの女の出入りも頻繁で、下赤の里はちょっとした繁華街で、夜までそれは賑やかな街の様子を呈していたという。建設工事に従事していた先輩や同僚から断片的には聞かされていたが、はたから見る彼女の話にはとても臨場感があった。

色々やり取りをしながらこの年上の美貌の人妻とすっかり親しくなり、里の入口で別れた。しかし、その後にも私にはある思いがあった。それは、彼女にはかなり年下の妹がいるということだ。

彼女の実家は少し離れた隣の集落で、妹は延岡に出て働いているのを知っていたし、時折り延岡から帰るバスの中で会ったり、道で出会って挨拶ぐらいは交わしたりしているが、姉にも劣らぬ美貌の持ち主なのだ。私はこの日ちょっと親しくなった姉さんを通じてその妹とお付き合いを始められたらいいな、などと下心を湧かしながら別れたのである。

そこで後日、同じ集落の住民であるY君にその話を持ち掛けたら、「バカかお前は、あの娘は延岡の○○医院の看護婦で、もうすぐそこの若先生と結婚式を挙げることになっているのをお前知らんのか」との答えだった。木馬と木馬道のことを思い出すたびによみがえる、ほろ苦い青春のひとこま 。今でも国道３２６号の下赤を通るたびに脳裏によみがえる木馬道の思い出である。

木馬道

木馬

木馬を使って木材運搬風景

月例山行　姫島

（会友　11　安部可人）

（始めに）年寄りが見知らぬ土地の山に行くとき、事前に歴史を調べるのもよい。姫島は１回目月例登山(不明）、2007年２回目、今回は３度目になる。今回初めて姫島の面白い歴史を知った。「杵築市誌」で偶然古庄虎二を知った。

（殺人事件）1962年、暴力団と関係する兄弟が島に帰り、映画館とパチンコ店を開いた。青年団が少女歌劇団公演を無料で村民に観せたら、俺の映画館の客入りが悪いと脅し、暴力をふるった。堪忍袋の緒が切れた青年団30人が、兄弟を公園に呼び出して、こん棒でたたき、結局２人は死んだ。首謀者一人が２年の懲役、あとは執行猶予のかるい判決、情状酌量。これは全国版TVドラマ化された。

（藤本村長親子56年）姫島村では、56年間村長選挙はなかった。父親熊雄村長についで、藤本昭夫は16年間選挙なし任期32年を務めた。これまた、全国版に流された。藤本村長が村の為つくしたと、考えてもよい。

（流罪）「野荒とは、他人之農作物を窃取しなり。藩之処分は、姫島に流罪せしなり」スイカ泥棒が、姫島流罪とは刑が重い。イギリスでは、パンを盗んだ少年が、オーストラリアへ流された（オーストラリアは流刑者が築いた国）。

（黒船姫島に来る）知らんかった、感激！幕臣勝海舟が来て、幕府の海軍補給基地をもうけた。村長庄屋古庄虎二をサムライに格上げして、外国人との交渉にあたらせた。虎二は食料あげます、釣りに行きませんかと、外国人にご機嫌をとり、上手にいなした。虎二の柔軟な外交は、幕末の姫島国東の危機を救った、偉人ですね！

（姫島観光）第一回目の月例では、西さんと「古庄庄屋屋敷」を見学した。はるばる海岸を歩いて、温泉は休館だった。黒曜石（石器の材料）と象の化石を見た。石器人が丸き舟で来た。象もいた。姫島キツネ踊りだけではない。

（あんべよしと）

2．支部活動

10月　喜寿登山

高崎山（628.4m）

2022年10月10日（月）

（会員　14505　下川智子）

今年の喜寿登山は10月10日（月）スポーツの日に44名の会員、会友の参加で行われた。

喜寿の方は丸井弘美、木本義雄、石神美智子、長野珪子さんの４名。

ただ残念なことに木本義雄さんは喜寿登山の直前の９月23日に亡くなられて一緒にお祝いをすることは叶わなかった。ご冥福をお祈りしたい。

人数が多いことや普段なかなか歩く機会の少ない参加者もいることから、田ノ浦ビーチから歩くA班と高崎山南登山口からスタートするB班に分けることにした。

田ノ浦ビーチからのA班30名は、田ノ浦ビーチ駐車場に９時集合。簡単な日程説明と安東支部長の挨拶の後、準備運動をして田ノ浦の海の水に手を浸して出発。国道10号の歩道橋を渡って山側に入る。すぐに急な坂道になり住宅の中のコンクリートの道をひたすら登り続ける。１時間ほどで台（デー）という柞原神社からの道との合流点につく。

そこからしばらくは平たんな道だがまた登りの急な道を登り上がると南登山口に到着。

11時に集合のB班14名と合流して全員で高崎山山頂を目指す。

12時山頂。安東支部長から喜寿登山の方へお祝いの挨拶と東九州支部からの記念品授与があり、喜寿の方からひとことづつお礼の挨拶があった。

そのあと、記念撮影。写真を撮ったあと、用意したシャンパン、甘酒、ワインで乾杯をして全員で喜寿を祝う。昼食のあと、山頂で解散してそれぞれのペースで自由に下山とする。

下山路の途中にある10メートル近い大きな岩のところで、負傷者を懸垂下降で下の道におろす訓練のデモンストレーションが行われた。安東支

部長が負傷者役の笠井さんを背負って懸垂下降をした。１人で懸垂下降で降りるのも大変なのに負傷者を背負っての懸垂下降の実演に無事２人が地面に降りついた時にはオーッという歓声があがった。

好天に恵まれ多くの会員、会友が参加して喜寿登山が今年も無事に終わった。

〈参加者〉

A班　総括リーダー　　下川

安東、中野(稔)、宮原、河野、平原(健)、笠井、丸井(弘)、丸井(元)、渡辺(千)、渡辺(和)、中野(梨)、木下、境、若月、阿南、宮本、柳瀬、清水(久)、賀来、古谷(耕)、平原(瑞)、三浦、古谷(あ)、阿部(幸)、青木、諸田、吉田(三)、松内

B班

星子、首藤、石神、塩月、藤澤、工藤、土屋、神田、阿部(可)、松村、長野、清水(道)、飛高

田ノ浦ビーチの水に手を浸して

高崎山山頂

１０月　月例山行

中山仙境（317m）・堂明（353m）

2022年10月23日（日）

（会員　11546　鹿島正隆）

10月23日（日）晴れ。午前８時、農村公園駐車場に集合。参加者24名。４つの班に編成。堂明、中山仙境ともに岩稜帯なので、全員ヘルメットを装着。各班、緊急時に備え、ロープ、スリング、カラビナ等登攀道具を持参した。

楽庭社横より入り、祇舎不動岩屋、堂明（353.0m）を目指す。祇舎不動登り口には石塔があり、そこから長い石段を登り詰めると祇舎不動である。右へトラバースして、左の岩尾根に取り付く。少し登ると眺望が開ける。堂明直下の岩を左にドラバースして尾根に出て、右に登り上がる。堂明の頂上へは、岩を跨いで渡る。少し恐怖心が起こる。岩上が堂明（高岩４等三角点）である。絶景が広がる。９時40分。堂明の先の涯下が一望岩への登山道である。恐る恐る下る。涯の一段目にはロープはなく、２段目にはロープが有る。一望岩までの尾根は狭く岩稜帯である。一望岩の手前の岩は左を通過するが、ハチの巣があるので要注意!!　尾根の突き当りに、壊れかけた３段ほどの梯子があり、注意しながら登り上がると、一望岩まではあと少し。一望岩には10段ほどの梯子が架かっていて登り上がる。３～４人程しか同時には上がれない。ザックを下し、梯子を登って一望岩からの絶景を楽しむ。10時30分。一望岩から後野越への下りも急傾斜で要注意!!　後野越からは谷筋を下り、車道に出る。11時10分。少し早いが六所権現で昼食。

11時45分再出発。いよいよ午後からは中山仙境である。実相院、霊仙寺を拝観、農村公園駐車場を通過して、前田登山口へ。12時00分。189mピークの先の第４番札所に登りあがると、祠があり、大展望が開ける。12時40分。眼下には香々地町の田園風景が広がり、その先は瀬戸内海である。下ると左に農村公園、右に小野迫登山口への分岐である。12時50分。いよいよここからが中山仙境の岩稜帯である。岩稜を登り上がる

無明橋

中山仙境

と、いきなり無明橋である。幅は狭く、左は断崖。右を巻いて通過することもできるので、無明橋を通らなくてもよい。少し下り、小さな石橋を渡り、谷筋を右にトラバースし、左の岩稜に取りつく。最後の鎖場を登りきると、高城（316.8m殿迫４等三角点）である。しばしの眺望を楽しむ。13時35分。高城のピークへは全員は上がれないので、各班の間隔をあけ、順番に通過。高城から先も細尾根なので要注意!!　慎重に進み、先端まで行くと、眺望が開ける。お地蔵さんにお参りし、少し引き返して、右下に下りるが、ここが最後の難所。下山口も見落とし易いので要注意!!　鎖が付いているが、涯を這うように、慎重に一歩一歩下る。涯下には隠洞穴（かくれうど）があり、ここまで来ると、ほっと一息つける。お参りして下山。車道に出たのが14時35分。14時45分、農村公園駐車場に、無事全員到着。今回の山行は、低山ながら、天気も良く、絶景を楽しめるフルコースであった。

※　残念ながら、岩稜帯のため、全員の集合写真はありません。

堂明（高岩四等三角点）

〈参加者〉リーダー　鹿島
賀来、松浦、佐藤(美)、櫻井、笠井、丹生、久知良、清水(道)、清水(久)、古谷(耕)、古谷(あ)、中野稔、中野(梨)、河野、境、丸井(弘)、宮本、安東、諸田、上野、中島、井村、山村

第38回 宮崎ウェストン祭

2022年11月3日（木）文化の日

（会員　11546　鹿島正隆）

宮崎県高千穂町五ヶ所三秀台にて、11月３日（木）（文化の日）、第38回宮崎ウェストン祭が開催された。ウェストン顕彰碑は、祖母山・阿蘇山・くじゅう山が望める三秀台に建っている。

当日の朝、大分駅で日本山岳会副会長の坂井広志氏と待ち合わせ、三秀台に案内した。

式典は11時から12時まで１時間ほど行われた。次第は以下のとおりであった。

点鐘（加藤、下川（東九州支部））、黙祷、献花、宮崎支部長（荒武八起氏）挨拶、日本山岳会副会長（坂井広志氏）挨拶、講和「九州におけるウェストン師」(田上敏行氏)、「ウェストンにささぐ」詩朗読､「ウェストン祭の歌」合唱、万歳三唱

参加者は38名（本部副会長：坂井氏、熊本：田上氏、北九州支部：２名、熊本支部：５名、東九州支部：８名、宮崎支部：21名）

式典終了後、宮崎支部のご厚意により、近くの公民館で、懇親会を兼ね、昼食会が開かれた。

「宮崎ウェストン祭」は今回で38回目となるが、その経緯は以下のとおりである。

昭和33年（1958年）日本山岳会会員・加藤数功氏と地元有志との懇談でウェストン師の祖母登山が話題になる。

昭和37年（1962年）矢津田日記が発見され、明治23年（1890年）11月６日ウェストン師が祖母山に登山されたことが確認される。「ウェストン顕彰碑建設特別委員会」設立される。

昭和41年（1966年）ウェストン顕彰碑除幕式以後通算10回の顕彰祭で中断

昭和60年（1985年）第１回宮崎ウェストン祭高千穂町との共催で開催

令和２年（2020年）、令和３年（2021年）はコロナ禍のため中止。

今回の「第38回宮崎ウェストン祭」は共催の高千穂町からコロナ禍のため中止の報告を受け、宮崎支部単独開催となった。宮崎支部のご尽力により開催できたわけだが、歴史ある「ウェストン祭」として、九州各支部が協力して伝統を引き継ぐ必要があると強く感じた。

帰りに、副会長の坂井氏を、荻岳にご案内した。天気も良く、くじゅう連山・阿蘇五岳・祖母傾山系が一望でき、最高の眺めであった。

〈参加者〉加藤、阿南、下川、鹿島、清水(道)、河野、河村、土屋、日向（会友）

三秀台　ウェストン碑の前にて

忘年登山

宇佐市　照山（176.3m）

（会員　9169　阿南寿範）

コロナで２年ぶりの忘年登山となった。これまではコロナで行動制限されていましたが、ここに来て行動制限のない活動が見えてきた。この機会を逃せばまた再びできる日がいつ来るか分からない状況になるかもしれないと思い実行する事となった。この日の参加者は、41名。午前10時、宇佐市下拝田「まほろば物産館」の集合。まほろば物産館の駐車場は広いのであるが参加者は一人一台のペースで集合したため、全ての車を駐車場に止めることが出来ず登山口まで移動することになった。移動では駅館川に架る拝田橋を渡り、宇佐別府道路をアンダーパス、三和酒類の工場を抜け、県道宇佐本耶馬溪線交差点を左折、２km程走ると左手に稲積山（406.0m）が見えて来る。黒と言う集落をＡ角に右折。稲積六神社の方向へ向う。伊呂波川（いろはかわ）を渡り直ぐそばの河川敷広場に駐車する。

安東支部長がこのコースをよく把握しているので、全員が車から下車した後、今日のコースの概要を説明してくれた。まず、最初に行くところは「稲積六神社」。渡ってきた河川を戻り稲積六神社へ向かう。この神社は三柱女神が降臨された伝承を持つ神社。日本の起源を伝えている神社でもあると説明。【宇佐にある二つの神奈備山（西の稲積山、東の御許山）】その一つ。朽ちたところではあるが中々神秘的なところである。伊呂波川を再度渡り、川沿いを上流に150mくらい行くと照山の登山口がある。右付きの取り付け道路を登る。30～40m登ると右手の山道に入る。20分くらい登ると、天福寺奥の院に着く。喘ぎながら登った石段を振り返ると南側が開け麻生谷、伊呂波川を中心に鬼落山や高山、遠くには鹿嵐山口等、院内の山々が望める。ここから標高差100m弱を広葉樹林帯の中を登る。登りあがると今日の登山で一番標高の高い稜線に出る。北東方向に（202.0m）ピークに向かう。小刻みにアップダウンを繰り返すこと約１時間で地図のトンネル上部を通過する。（地図を睨まないと気づかない）このトンネルは、東九州自動車道（福岡・大分区間）赤尾第三トンネルである。さらに北東方向に20分ほど進むと、今成横穴墓群が現れる。この墓群は稜線から少し下がったところにある。溶結凝灰岩壁に、数十基におよぶ横穴。死者を葬った後だとか？　見事である。ここから約10分で本日目的の照山。三等三角点（照山）に着く。ここに来るのに途中寄り道が多かったため、時間を要

宇佐市　照山

した。頂上で記念撮影を撮り下山は横山郵便局の方向に延びる支尾根を下る。広域農道へ下り着く。ここからも登れる様、駐車場、トイレもある。登山口と同様。ここからAs舗装道路を3.1kmほど歩き登山口に戻った。さすがにAs舗装は足が重い。山は高くはないものの歴史観のあるコースに満足した。

＜参加者＞

安東、阿南、飯田(勝)、鹿島、佐藤(秀)、下川、石神、櫻井、宮原、渡辺(千)、渡辺(和)、工藤、今川(美)、土屋、丹生、佐藤(裕)、境、久知良、平原(健)、笠井、山村、岩崎、松村、遠江、宮本、後藤、清水(道)、清水(久)、松浦、賀来、古谷(耕)、河津、平原(瑞)、榎園、古谷(あ)、諸田、吉田、上野、佐藤(美)、井村、河村

忘年会

日本文理大学湯布院研修所にて

（会員　9169　阿南寿範）

この研修所は、湯布院にあり温泉が出る。長く歩いた照山の忘年登山を終え、早速忘年会場に向かう。所用で忘年登山に参加できなかった人達が先に到着しており出迎えてくれた。忘年会の会場での準備を進めて頂いており大変助かった。自分の荷物を各部屋に運び、早速温泉に浸かった。浴場は広く露天風呂もあり貸し切り状態、今日は長い距離歩いたのでとても疲れたが、開放的な空間で疲れも一辺に吹き飛んだ。

午後６時にはみんな会場へ。そろったところで阿南事務局の司会で始まり、安東支部長のあいさつ、加藤前支部長、飯田前事務局長、首藤宏史さん等のあいさつを頂いた。御馳走を目前に“すきっ腹”に答えたが久しぶりの宴会、熱心に聞いていた。この後、首藤宏史さんが乾杯の音頭取り開宴。コロナの影響で付けていたマスクを一斉に外し食した。

空腹が満たされたころ、簡易ステージが出来、フラダンスショーが始まった。このフラダンスチームは、当会員が所属するクラブチームが今回の忘年会で是非見てもらいたいと言われたので、お願いしたものである。レパートリーも多くショーはとても盛り上がり、最後にはアンコールもあり会場からの飛び入りで会員も一緒に輪に加わり、大いにハワイヤンムードを味わった。宴もたけなわとなった頃から、司会者の進行で皆が順番に一人一人近況報告を行った。皆、思い思いに「今年の反省」、「来年の抱負」、「日常生活（健康状況こと）」等を話された。

時間も下がり９時前となり、全員で記念撮影をしお開きとした。その後、会場を別の部屋に移し二次会。ここでも大いに盛り上がり久しぶりの解放感を味わった。これまでコロナで自粛してきたが、飲み会の必要性を大きく感じた。明日の朝のことを心配し、午後11時過ぎ、部屋に帰り就寝した。

＜参加者＞

加藤(英)、阿南、安東、飯田(勝)、下川、工藤、今川(美)、土屋、丹生、首藤、河野、久知良、笠井、山村、岩崎、石川、諸田、上野、河村　（泊）
首藤、吉田　（泊なし）

NBU湯布院研修所

楽しく踊る飯田顧問

第９期　登山入門教室（実践講座）

鋸山（田原山）（542m）

2022年11月27日（日）

（会員　16315　佐藤裕之）

11月27日（日）

テーマ　ちょっと難しい山に登る。

難しい山に登るということで、鋸山に登る。

岩場の連続となるので、リーダー、サブリーダーを決め、参加者の安全確保を図る。

緊張する場面もあり、受講生の中からも初心者には難しすぎるのではないか？との声もあがる。

次回以降は、少し難易度を下げたい。

鋸山だけでは物足りないので、熊野摩崖仏を参拝して車道を周回して帰る。時間的には稜線に登り返した方が早いようだが、下りに岩稜があり、危険である。受講生の中には疲労の目立つ者もあり、周回コースが正解であった。車道をがやがやと、のんびり歩くのも悪くはない。

４時間56分　5.2ｋｍ　累積標高差420m

〈参加者〉安東、鹿島、佐藤(裕)、丹生、中野(稔)、笠井、上野、古谷(耕)、中野(梨)、佐藤(美)、久知良、平原(健)、平原(瑞)

受講生　１３人

鋸山研修風景

熊野摩崖仏

第９期　登山入門教室（実践講座）

黒岩山（1,503m）　三俣山（1,745m）

2023年１月14日（土）・15日（日）

（会員　16315　佐藤裕之）

１月14日（土）　黒岩山　天気　雨

雨の予報だが、小雨決行で実施する。

予定では、泉水から黒岩の予定だが、水をたっぷり含んだ泥道が予想されたので、車を宿舎の九重ヒュッテに置き、牧ノ戸まで歩道を歩き、黒岩まで登ることにした。それでも、牧ノ戸黒岩間で泥べっちゃんになる。

途中で雨もやみ、１月中旬にしては、寒さも知れている。予想ほどの悪天ではなかったので、ほっとした。雪は黒岩山頂に申し訳程度に残っていた。

早く下山できたので、日帰りの者も含めて、研修会（というか、ざっくばらんに話し合う。）を開き、有意義であった。

冷えた体に、九重ヒュッテの温泉が心地良い。居心地の良い小屋である。

４時間　8.3ｋｍ　標高差463m

１月15日（日）　三俣山　天気　曇り

残念ながら、雪がない。

またまた、泥べっちゃんになる。

出発は、ガスの中だったが、諏蛾守越手前で、雲海の上に出て、絶景が広がり、一同感嘆の声を上げる。

初心者多く、体力面の不安もあり、三俣西峰までを考えていたが、西峰で、全員本峰まで向かうこととなり、志の高さを確認する。とは言え、泥道には難渋する。

下山後は、ヒュッテの「団子汁」で少し遅い昼食とするが、これはうまい。

雪山というより、泥道の歩き方の研修みたいになったが、山小屋に泊まって、懇親も深まり、多数の入会予定者を獲得して、有意義な研修であった。

５時間　7.1ｋｍ　累積標高差655m

〈参加者〉佐藤(裕)、丹生、中野(稔)、中野(梨)
受講生　初日９人　２日目　７人

研修実施前にコロナ第８波がピークを迎えて、実施すべきか、悩んだが、どうやらヤマを越えたようだ、と判断してぎりぎりの開催となった。クラスターも発生せず、ほっとした。これで終息するのだろうか？期待したいものだ。

登山教室も無事、終了して約９名の会友入会希望者もあり、有意義な研修であったと思う。受講者の皆さんも、年度当初に比べると力をつけているようである。入会された会友の方が会員になりたいと思える組織でありたいものである。

リーダー・補助員で参加された会員等の皆さん。本当にお疲れ様でした。来年度もよろしくお願いします。

黒岩山頂

九重ヒュッテ前

中級者登山研修会

積雪期研修　伯耆大山（1,729m）

2023年１月７日～８日
（会友　264　川村寅斉）

【１月６日まで　研修準備】

昨年の中級者登山研修会（沢登り）の一般参加をきっかけに、夫婦そろって会友に新規入会させていただいた。今回の山行は令和４年度中級者登山研修会の最後となる伯耆大山積雪期登山研修。本格的な雪山装備など我が家にあるはずもなく、夏以降、冬靴、アイゼン、ピッケル、ワカンなどの必要装備の準備をしてきたが、肝心の冬靴が山渓にない！入荷時期も未定！思った通りに準備が進まない中、九州の主な登山用品店に在庫を聞きまくり、佐賀のベースキャンプで１点のみ自分に合いそうなのがみつかった。佐賀遠征の末になんとか冬靴をゲットしたのが高崎山のアイゼン研修（11/23）の２日前。12月、仕事の空き時間を利用してアイゼンを履く練習をし、ワカンを履く練習をした。YouTubeを見てチェストコイルの練習をした。雪山登山の本を読み竹ペグなるものがあることを知り、仕事の空き時間に竹ペグを見よう見まねで自作した。年末の寒波の時にはアイゼン歩行の練習で大船山東尾根に夫婦で登り、氷点下の庭でテン泊をした。思いついたことをやりきって年を越した。さあいよいよ研修山行がせまってきたというときに、妻の職場で新型コロナ感染による深刻な人手不足が発生。彼女は休暇を返上し、研修会不参加を支部長に報告した。まったく思い通りにいかない。この間支部長からの研修内容（案）も何度か変更があった。積雪の状況、当日の天候など支部長も思った通りにいかないと悩んでいたことだろう。

最終的には、７合尾根をパーティ分けしてサイマルクライミングで登るプランとなった。

【１月７日　研修１日目】

８時宇佐集合。中国自動車道の安佐SAで長崎メンバーと合流し鳥取へ向かう。15時ごろに大山南光河原駐車場に着き、駐車場奥にテント設営。

スノーシャベルで整地し、みんなで踏み固める。男性テントと女性テントを設営した。なぜか間にツェルトがひとつ。中には田所さんが。「なんてことを」と思ったが、みんな気にしていない。このメンバーにとっては普通のことらしい。

テント設営が終わるとさっそく夕食。男性テントに集合し、生野さんが段取りしてくれたちゃんぽん（＊）と、どこからともなく現れた酒類をみんなでいただく。夕食後、各々寝床に撤収したあと、男性テントでは少しだけ寝酒を飲んでおとなしく眠りについた。

今回は駐車場横をテン場としたので、水あり、酒あり、ツマミありの快適なテン泊だった。次回は山中のもっとシビアなテント場でテント設営や雪山生活技術を学んで、雪洞の作り方も覚えたい。支部長よろしくお願いします！

（＊）昨年長崎竜頭泉に遠征した時もちゃんぽんを食べて解散した。今回の研修も最終日に美東ＳＡでちゃんぽんを食べて解散した。どうやら、ちゃんぽんは当支部のソウルフードのようだ。

男性テントと女性テントと田所テント

支部食ちゃんぽん

【１月８日　研修２日目】

朝５時過ぎに起床し各自朝食を済ませる。支部長は朝食時も研修ルートを決めかねているようだった。「まずは元谷まで行こう」。７時１０分にテン場を出発。チームは前夜に以下の４チームに編成されていた。

安東（リーダー）・佐藤(裕)
田所（リーダー）・橋本(桂)・寺道
上野（リーダー）・橋本(淳)
生野（リーダー）・川村(寅)

以下は山行概要
（文中の番号は地図中の番号の場所を指す）
行者谷登山口から大神山神社を経て元谷へ。元谷避難小屋手前でワカンを装着❶。

７合尾根方面へ登る。避難小屋までは行者谷ルートに沿ってトレースがあったが、ここから先はトレースなし。隊列を組んで先頭を入れ替わりながら登っていく❷。

進路の目安にしていた堰堤まで登ったところで、支部長「一般登山道へ」の指示❸。ここからラッセルしながら谷をトラバースしていく❹。

１時間弱のトラバース後、全員一般登山道（行者谷ルート）へ合流。６合目避難小屋をめざす。

避難小屋横の斜面で滑落停止訓練をした後❺、夏山登山道で下山した。

13時ごろにテン場に下山したが、この後翌日にかけて気温が高くなる予報。このまま続けても雪山研修にはならないという判断で、３日間の研修日程を１日短縮。すぐにテントを撤収し、大分へ帰ることになった。

なぜ支部長は計画していた７合尾根の登りを断念したのか、帰りの車内で同乗の先輩の意見を聞いて考えてみた。
①積雪の状態が良くない（締まっていない）
②トレースがない
③パーティの積雪期登山の経験値

元谷周辺を登っているときの雪は、柔らかくフワフワしていた。傾斜の急な登りではなかなか前に進めない場面もあった。元谷避難小屋から上はトレースもない。積雪期登山の経験の少ないメンバーではラッセルによる体力の消耗で尾根に上がるまでの時間が長くなり、雪崩に合うリスクが高くなる。私には雪崩の起きやすいコンディションはわからないが、当日の気温などを含めて考慮した結果、７合尾根をあきらめたのではないか。

今回の研修では計画していたサイマルクライミングは体験できなかったが、積雪期登山初心者の私にとってワカン歩行やラッセル、滑落停止訓練は初めてだったので有意義な研修だった。技術的なことに加えて積雪期特有の山行プランの立て方、現地での判断について考察し、積雪期登山の難しさを実感することができたのがいちばんの収穫だった。

今後は今回行けなかった７合尾根を登って経験

を積み、さらに北壁の弥山尾根にも挑戦してみたい。支部長よろしくお願いします！

当支部に入会するまでは、ソロか夫婦での山行しかしてこなかったが、今回の研修はとても楽しかった。昨年からの中級メンバーとの山行は自分に新しい登山スタイルを教えてくれた。今後もこのメンバーと研鑽を積み、新たな登山技術を習得し、ステップアップしていきたい。

研修ルート（行者谷周辺）

行者谷トラバース

滑落停止訓練

集合写真

〈参加者〉〈リーダー〉：安東支部長

佐藤(裕)、田所、橋本(桂)

生野、上野、寺道、川村(寅)

橋本(淳)（一般参加）

JAC支部ユース交流会 in 広島2022

天応烏帽子岩（広島県）（409m）

2022年11月３日～４日

（準会員　Ａ－ 0488　橋本桂）

11月５～６日に広島支部創立25周年の記念式典と祝賀会が催され、それにあわせて、JAC支部・本部の交流会が実施された。YOUTH CLUB委員会、担当理事委員長の松原尚之氏より直接連絡が入り、当支部も参加募集し、５名の参加予定であったが、発熱などで、３人の参加のみとなった。以下、参加した橋本桂会員の報告です。（安東）

報告　橋本桂（準会員　Ａ－0488）

令和４年、11月３日～６日にかけて、日本山岳会広島支部創立25周年を記念し、交流会に参加させていただいた。

研修では、クライミング技術、初心者講習も開催とあり、早くから楽しみにしていた。東九州支部からは３名が参加。都合により、３日と４日の２日間の研修となる。

研修初日、快晴。

天応烏帽子岩山登山口駐車場にはすでに10数名のクライマー達が勢揃いしていた。クライマーにお会いした途端、（とんでもない場違いなところに来てしまった…）と、おおいにひるんだ。精鋭された彼等の風格や、みなぎるオーラにただ、圧倒されたからだ。どうにか気持ちを保ちつつ、まずは歩いて30分ほどの天応烏帽子岩山直下に到着。はじめに、山岳ガイドでベテランクライマーの松原尚之先生から初心者講習を受ける。支点の取り方やロープワーク、先生の講義はわかりやすく、何故これが必要なのか根拠をきちんと教えてくださりイメージしやすかった。また、先生の穏やかな口調や物腰にリラックスして講義を受けることができた。

講義の後は実技に移る。私達は第一ポピュラーをマルチピッチで登攀。レベルとしては、1ピッチ5.5、2ピッチ5.3～5.6のレベル。1ピッチ目は難なく登る事が出来た。少しずつ高度を上げる

と、瀬戸内の素晴らしい景色に出会う事ができた。輝く海と海面に浮かぶ美しい島々が、私を応援してくれた。登攀が進み、２ピッチ目となると、困難な岩場に行き詰まる。そうなると今まで素晴らしいと感じていた景色も一瞬にして恐怖に感じるようになる。呼吸を落ち着かせ、（大丈夫…）と、つぶやき、次の一歩を冷静に踏み出す。東九州支部の先輩達のアドバイスもあり、どうにか登攀することができた。

夜は江田島青少年交流会館に宿泊。皆で食事を摂った後、広島支部ネパール、アマ・ダブラム登山の南西稜登頂の報告会。登山隊は呼びかけに集まった４名が挑戦。その中のリーダーY氏と25歳若き挑戦者O君の報告。10月４日から29日までの25日間、登頂までの装備や資金集め、かかった費用など、大変興味深い内容だった。O君は途中高山病になり山頂は断念。一時酸素飽和度が60％まで低下し、危険な状況に陥った。下山し回復はあったものの、6000メートル峰の高所順応の難しさを感じた。４名のうち、１名が登頂。困難を乗り越えて、挑戦することの素晴らしさを教えてくれた。

２日目快晴。

銀座尾根、烏帽子岩とドンガメ岩の登攀。私にとってはじめてのマルチピッチ。メンバーは松原先生と、本部のAさん、私という大変貴重な機会に恵まれる。先生は穏やかに先を進みカラビナの操作からビレイの手ほどきを優しく教えてくれた。脚の置き場も見つからない場所も、落ち着いてピークを踏む事ができた。

充実した二日間だった。年齢も経験値も違う仲間が互いに研鑽を積む事の素晴らしさを感じた。はじめは集ったメンバーに圧倒され、相手にもされないと思っていたが全く誤解だった。皆、親切で優しく、初心者の私に優しくアドバイスをくださった。これからの私には大きな収穫だった。

この度は貴重な機会を作っていただき、心から感謝している。イベント運営に関しご尽力いただいた日本山岳会理事、松原尚之先生をはじめ本部の皆様、お招きいただいた広島支部の皆様、ご参加の他支部の皆様、この場を借りて心からお礼を申し上げます。

山を愛する仲間との再会を願って。

<参加者>　田所、笠井、橋本、本部常務理事の柏、松田理事、松原委員長、青年部、WV部、学生部、東海支部、関西支部、広島支部

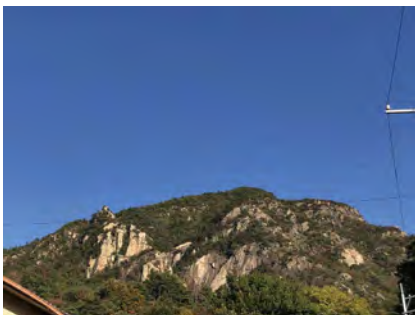
合計32名

最高の記念に

ドンガメ岩にて

ナメラ岩全体

初心者講習



天応烏帽子岩全景

３．個人投稿

ペンリレー・第45回

カトマンズの病院で
（平成26年10月初旬）

（会員　15827　土屋多喜子）

退院の日、病院の日本人職員とともに

真っ青な空に映える八千メートル級のヒマラヤの峰々、点在する青い氷河湖。この景色をネパールヒマラヤのクンブ地方にある五千四百メートルの山、ゴーキョピークから間近に見ようと、星子さんをリーダーに、男女七名のトレッキング隊を組み、用意周到に出発した。

飛行機がカトマンズに着く少し前から気分が悪くなった。飛行機酔いかな？下りたら良くなるだろうと思いつつ、夜も遅い空港に下りた。ホテルに着いたのは夜中に近かった。

気分はますます悪くなり、強い吐き気や目まいがし、歩くのもふらふら。同室者は、翌朝早くトレッキングに出発のため、重量制限のある荷造りをしている。そんな彼女を横目に私は何も出来ず、ベッドでひたすら気分の悪さをこらえた。

翌朝になっても状態は改善せず、リーダーも私も同行は無理と判断、隊から外れた。

「大丈夫？早く良くなってね、行ってくるね」など、さまざまな声掛けを受け、「私の分も良く見てね」とベッドから薄目を開けて見送った。

現地旅行者の人と病院を訪れて入院となった。患者の殆どが世界からの旅行者という病院で、医師は「機内食の野菜にあたった食あたりでしょう」とかなんとか診断をつけようとしたが、私は血圧の不安定からくる症状と思った。

降圧剤を服用していた血圧は安定していたが、長い飛行時間の間に、乗り換えや時間待ち、何回もの離発着、高度障害などが重なり、血圧が変動したのだろう、大したことはない、一日、二日で良くなるだろうと何の不安もなかった。

同室で治療を受けていたカナダ人の若い女性が「アイ　ラブ　ユー」と電話していたが、分かったのはそこまで。医師の朝の挨拶は「良いですか」であり、消灯時のナースは「眠るです」と部屋から出る。私は日に何度か測定の血圧の値を知りたいけれど、どう言えばいいのか少ない単語をあれこれ考える。合間にトレッキングをしている皆の事が時々頭をよぎる。

病院の職員に日本人女性が居て、医師や旅行保険会社とのやりとりにとても助かった。瞳の大きな理知的な女性。その大きな瞳で相手をじっと見つめ、落ち着いて応対する。丁寧で、優雅で、凛としていて・・・。世界の人が集まる病院で、日本女性の評価を高めてくれるようで、とても嬉しく誇らしい。

症状も改善し、後はホテル療養となった。先に退院する私は「ジャパニーズキャンディー、プリーズ」と飴三個を渡し「バイバイ」と別れた。カナダ人の女性も、次第に落ち着き美しい笑顔も出るようになっていた。

念願の五千四百メートルまでのトレッキングは出来なかったが、異国に病んで、異国のホスピタリティーを身をもって感じ、そして素敵な日本女性の活躍も見て、忘れ難い旅の一頁となった。

次回のペンリレーは、工藤吉子会員（15689）にお願いしました。お楽しみに！

より安全な登山のために　No. 47

奴雁（どがん）

（会員　9193　安東桂三）

2023年１月11日の朝日新聞で「奴雁」という言葉を知った。記事によると福沢諭吉の論集にある言葉とのこと。以下にそれを記載。

「学者は国の奴雁なり。奴雁とは群雁野に在て餌を啄むとき、其内に必ず一羽は首を揚げて四方の様子を窺ひ、不意の難に番をする者あり、之を奴雁と云ふ。学者も亦斯の如し」「人の説を咎（とが）む可らざるの論」福沢諭吉全集第19巻（明治７年）

雁の群れで餌をついばむ時、一羽首を揚げて四方の様子をうかがい、不意に押し寄せる難に番をする。それが奴雁と言う。奴雁は、登山にも必要なことと思う。パーティで登山をするときに、そのパーティ内に「奴雁」の役割をするメンバーが、必要だ。

日本山岳会の常務理事、萩原浩司さんは、彼の著書「萩原編集長　危機一髪！」（2020年７月１日初版）の第８話、雷雲接近！　花より命の記事中で、語っている。

穂高での登山教室、初日に上高地から、岳沢に登山中、15時くらいに遠くに小さく雷の音を聞いた。萩原さんは、翌日の岳沢出発を１時間早め、15時までに穂高岳山荘に到着するようにと安全策を考えた。前穂高岳に登り、吊尾根の最低コルを過ぎたあたりで、萩原さんは、遠くに雷鳴の音を聞いた。メンバーのほとんどは、それに気がつかなかった。萩原さんは、この雷鳴は、昨日の15時の雷鳴に比べると早すぎると感じ、このメンバーでは、どんなに急いでも、奥穂高岳を越えて穂高岳山荘に下るのに、１時間はかかるだろうし、その間に雷雲につかまったら大変なことになると心配した。

そして奥穂高岳の最後の登りに差し掛かったところで、焼岳方面に白い雲を見て、稲妻が光り、雷鳴も先ほどより大きく近くに聞いた。が、参加者の女性は、美しいイワギキョウの群落を見つけて「まあーきれい！」と立ち止まった。萩原さんは、イワギキョウを見つけてはいたが、黙ってスルーしようとしていたところだった。この状況で、のんびりと立ち止まることは避けたいと思ったが、一人が撮影すると、後続者はそれが終わるのをまって、撮影。

遅れの伝播は、危険を招く。萩原さんは、無理やり追い立てるように、指示した。奥穂高岳で記念撮影もそこそこに追い立てて下る途中、ジャンダルムの真上付近でピカッと光ったときに、さすがにメンバーは危険な状態を悟ったが、萩原さんは、焦りは禁物と「落ち着いて、立ち止まらずに慎重に下山しましょう」と伝えて、雷鳴から逃げるように、穂高岳山荘に下りついた。

多くのメンバーは、周りの情報を収集せず、花や風景や、その他を楽しむ。もし危険な状況に遭遇し、それを回避しても、翌日は、その危険な状況は、喉元を過ぎれば熱さ忘れるのごとし。登山にも奴雁の任のメンバーは必要。支部山行、グループ山行、レベルアップを。

萩原浩司さんの著書「萩原編集長　危機一髪！」一読を。

より安全な登山のために No. 1～No. 47まで

（会員　9193　安東桂三）

平成23年６月21日夜、久保委員より、支部報に、何か書いてくれないかと原稿依頼が、ありました。技術的なもの、あるいは、何か会員・会友に刺激になるもの、400～600字でとの、依頼でした。つたない経験、知識から得たものを少しずつ文章にしておこうと引き受けました。2011年７月25日発行の第54号支部報に「より安全登山のためにNo.1」を執筆し、2023年１月発行の100号（本号）に「より安全登山のためにNo. 47」を書くことが出来ました。

当初、ネタ切れになれば、連載を止めようと考えていましたが、ネタが切れず、ネタが増えるばかりです。昭和から平成になり、遭難事故数・遭難者数は、増えるばかりで、止まるようなことはありません。この頃は国内で毎年3000人が遭難して、300人ほどが亡くなっています。令和３年は、大分の山岳で３人亡くなり、令和４年は６人亡くなりました。その６人の内、３人は由布岳で

の死亡事故です。それが支部に直接関係することはないと思いますが、同じ山をするものとして受け止めなければならないと思います。そのような背景で、ネタ切れにならない状況です。

私の知る限りで、支部に関係するメンバーが、山岳で３名ほど亡くなっています。また、滑落や事故、道迷い、下山遅れは、いくつかあるようです。そのようなことが無くなれば、「より安全登山のために」から、卒業できると考えています。

私の無名山ガイドブック（No. 87）

笹輪(295. 29m)・柚野木(251. 5m)・城(174. 4m)

（会員　10912　飯田勝之）

大野川を挟んで白鹿山と対峙するように、旧犬飼町と野津町の境界をなす半月状の小山塊とその東の台地であるが、今回はその中の三つの小ピークを紹介しよう。

笹輪

この山域の南端にあり最高地点となるピークである。北から連なる稜線がこのピーク付近で大きく西にカーブしており、一帯はスギ、ヒノキの植林地が多いが、稜線部分はかなり広範囲で照葉樹林が残って、三角点があるところはシイ、カシ、クヌギ、ナラ、クロキ、ネズミモチ、ヒシャカキなどの下にコシダがあり、東の斜面はシイ、アラカシ、タブなどの極相林のようすである。

国道502号線の柳井瀬のバス停から北に三重川沿いに行き、さらに吉田川に沿って東に行くと、長小野への入り口がある。橋を渡り直ぐに北に上り、集落手前を右に谷を入って水田沿い小道をいくと、橋から約700mで三叉路があり、これを左に進むと三叉路から300mほどで左にため池がある。ここまで車が入れる。ここより荒れた林道を進むと池から７分で三叉路があり、この分かれ目の又から前の稜線にとりつくと良い。シイ、カシの二次林を直登していく。傾斜が急だが、ほぼ真っ直ぐに登ることになる。照葉樹の素晴らしい二次林だ。林道から約30分の登りで、傾斜が緩くなれば山頂で二等三角点がある。小野の西の秋山の集落から奥へ上る舗装の林道が山頂直下まで通じており、これを車で上ると、10分足らずで山頂に、また山頂の反対に３分で秋葉社の祠のあるピークに達せたれる。

参考タイム：ため池→７分→稜線直登→30分→山頂

２万５千分の１地図：犬飼

柚野木

前の笹輪と対峙する同じ稜線の北端のピークだ。一帯の山は谷や急傾斜地を除きほとんどスギ、ヒノキの人工林であるが、三角点のあるピークの北側斜面はかなり広い広葉樹の二次林となっているが南側はヒノキの植林である。

犬飼町大寒から野津町内河野に通じる農道の、大峠トンネルの西口から約200m西に、右手（北）の小さな谷に入る舗装の小道がある。ここより入ると、小道は30mほどで途絶えるので、左手（西）のヒノキの斜面を直登して行く。谷から100mほどで稜線の鞍部に着く。旧大峠である。ここより北東に、左はヒノキ林、右は灌木林の境を登っていく。一旦緩くなり、再び急な稜線直登で農道登り口から30分あまりで山頂に着く。旧大峠の鞍部から反対に南に登れば大峠山まで25分ほどで登れる。三等三角点である。

参考タイム：農道→30分→三角点

２万５千分の１地図：犬飼

城

野津町中心部の野津市の西の丘陵地の一画で、吉四六ランドのある丘の南の鈍頂上である。

稜線上の最高地点である。

国道10号線から吉四六ランドへの道を入り、スポーツ公園入口を過ぎて400mほど先に、左に入る小道がある。この道を進み400m程ほど先の分岐を左に行くと400mで道は左にカーブして右に小径が分かれる。ここまで車で入れよう。右の道を進み田んぼ横から山へと入る道を進むと20分ほどで終点で、そこから踏み跡道を５分ほどで三等三角点山頂に着く。

参考タイム：三差路→30分→山頂

２万５千分の１地図：犬飼

登山会報リバイバル（第２回）
雪深峠はどこにあったか（後編）

（会友　11　安部可人）

古賀勝著『九重高原開拓史』の巻末の参考文献には、小野喜美夫の『朝日長者』があった。実は筌ノ口の郷土歴史家故人小野さんを訪問して、「九重・飯田高原百話集』2500円を義理で買った、買ってよかった。読み逃したのが、Ｐ97「雪深峠と火切ヶ野」だ。「千町無田より湯平に越える峠で、古くて最も多くのひとが踏んだ峠である。山頂を越えるような険しさはなく、山の間をだらだら越すので、冬は雪が深い、最高点を見落とすくらい越し易さがあった（「塩・魚の道」であり「硫黄の道」でもあった）。この文章を読むと、折元さんや小野さんの書いているのが“雪深峠”となる。「硫黄山と川西道路」硫黄は雪深峠～湯平～府内へ、無田中に中継所があった。庄内の東長宝に倉庫があった。湯平温泉では馬糞の苦情があった。即ち雪深峠で馬が交替した事が分かる。（川西道路）日清・日露戦争で硫黄は軍需品として、道路による馬車運送が計画された。これが川西道路であり、横断道路の前身である。男池との十字路あたり、今も当時の砂利道が残る。川西は、酒場・妓楼（遊郭）で賑わった。昭和28年の大水害では、主要道13曲がりの代替のため、川西道路が一時復活した。

（最後に）元久留米藩士・開拓者青木牛之介に敬意を表したい。遠路はるばる、入植許可願い何度も大分県庁と交渉して、冷ややかだった役人柴山と生涯の友人となった。粗食・極寒を交渉で歩きとおした不屈の武士青木が77歳（81歳もある）の天命をいただいたのは神様が見ていたのだ。（追記）男池途中にも開拓碑を見る。30年前野上川のエノハ釣りで、廃屋となった師匠の実家に泊まったが、３月でも寒かった。

（令和３年９月24日　現地調査報告）

＊地元の話「農閑期、若者たちは米２斗（20升）を牛の背にのせて、湯平温泉へ遊びに行った（目的は遊郭）。帰りは酒と女にくたびれ果て、牛の背に乗ったとか。大分から魚の干物を運ぶ行商人は交換した米を牛の背に乗せて、高く売れたそうです。昭和の木炭トラックはやがて米軍が放出した四輪駆動車と交替して、自衛隊参加の九州横断道路の造成となる。その歴史知らない。歴史に詳しい長老たちは死んだ。地元では、崩平山の北斜面の牛床（熊の墓）の陽当りの悪いのを“雪深峠”という。スキー場の候補地であった。

＊私のルート　須久保～千町無田（広大な沼地の意味）朝日神社～ゲート駐車～40分緩い林道登り～扇山無線塔管理道入口～２分～1090等高線の雪深峠～30分緩い下り～1034加藤のいう雪深峠往2.7ｋｍ、高度差100m、往復２時間20分

1034から湯平へ　左をトラヴァース、扇山牧場内の940.3を経由して湯平へ高度差480を下ったと推測する（帰りがきつい）。

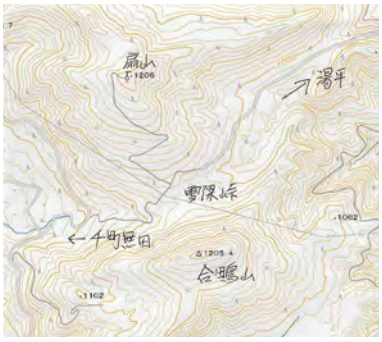
カメラを忘れて、写真はない。冬もう一度、今度は扇山登山して全景を撮りたい。今年から日本山岳会が「全国の古道歩き」の調査報告を求めている。これは安部個人の古道歩きでした。

（雪深峠の座標）加藤1034m　33度10分32.4秒、131度17分30.6秒（BM1－H=1034mの標識ある三差路が峠）

安部1090m　33度10分11.5秒、131度16分57.3秒（50m区間分水嶺が峠）

（硫黄道路）硫黄山直下の“硫黄鉱山道路”は、1350地点で行き止まり軽トラ駐車した（目前がすがもり峠）。崩壊して落石が怖い。60年間歩いた登山路は廃道化する運命か。硫黄道路は廃墟となって残る。令和３年11月13日コギコギクラブ三俣山は途中まで行った。

地形図「大船山」「湯平」



11月の群馬県の山々

2022年11月16日～20日

（会員　16315　佐藤裕之）

岩櫃山（803m）

・日　時：2022年11月16日（水）　晴れ

「山と渓谷」で見た群馬県の四万温泉、「積善館」の「元禄の湯」に１度は浸かりたいと思い、泊まる宿を決めてから登りたい山を決めることにした。積善館に向かう途中に岩櫃山に登る時間があるので、立ち寄ることにした。ここは、真田一族で有名な山城だ。初めは歩きやすく、山城見物も面白く観光気分だが、次第にルートが険しくなり、頂上付近は岩場の連続となり、NHKの日本百低山でも紹介された絶景が広がる。テレビを見ていたのでヘルメットを用意していたが、正解。登山口にはビジターセンターがあり、岩櫃城の模型が見事である。迷いやすい箇所もあり、低山とは思えない登り応えがある。

本日宿泊は、「元禄の湯」で知られる積善館だが、今では「千と千尋」のモデルとなったことで知られており、玄関前は見物客で、にぎやかである。ここの「元禄の湯」は一度は浸かりたい名湯である。

なお、積善館に向かう途中の東善寺に「小栗上野介の墓」があり、日本人で初めてヨーロッパアルプスに登った栗本鋤雲（じょうん）の胸像もある。

時間　２時間21分　累積標高差　390m

積善館

赤城山（1828m）

・日　時：11月17日（木）　曇り

岩櫃　山頂直下の岩場

国定忠治で知られる山だが、赤城山という名のピークはなく、山群の総称である。赤城神社に参拝後、11時から登山開始と、ちと遅い出発となる。まずは、最高峰の黒薙山をめざす。登りの連続でちょっと厳しい。頂上の先にある展望台からの谷川連峰がみごとである。展望を楽しんだ後、鳥居峠まで縦走した後、覚満淵（小尾瀬とも言うべき湿地帯）を周遊し、小地蔵岳にも登って赤城山を満喫する。気持ちの良い縦走ができた。

３時間40分　4.5ｋｍ　累積標高差570m

南から見た赤城山

榛名山（1449m）

・日　時：11月18日（金）　曇り

榛名山も、そういう名前のピークはない。主峰は榛名富士で、最高峰は掃部が岳である。

ゆうすげ温泉の駐車場に車を停め、いざ出発。外輪山を一周することにした。紅葉は盛りを過ぎたが、一部残って美しい。それぞれのピークの高低差は少ないが、登ったり、降りたりの繰り返しで、累計すると楽な山とは言えない。最高峰掃部が岳への登りは、延々と木段が続く。榛名湖畔に降りて、名物ワカサギ定食を食べる。その後も

ひたすら歩き続ける。榛名富士には観光のロープウエーがある。楽をしようとロープウェーに乗ろうかとも思ったが、ついに歩き通した。

下山後、少し時間があるので、榛名神社まで車で往復。他に例のない荘厳無比のお宮さんで圧倒されまくる。 榛名山、なかなか良い。

６時間26分　10ｋｍ　累積標高差　994m

榛名山　　夜景

浅間隠山（1757m）

・日　時：11月19日（土）　晴れ

特に難しいところはないが、何とも言えない味があり、山頂からの眺めは素晴らしい。さすが日本200名山である。 特に浅間山方面が圧巻で、いつまで眺めても飽きない。下山途中不思議な黒い岩を見つけた。岩か？動物か？と眺めているとむっくり起きだした。経験がないので、てっきり熊と勘違いして、速やかに退散したが、後で色々調べるとニホンカモシカであった。九州では滅多に合わないが、本州ではちょくちょく出会う。カモシカをクマと勘違いしたのは、ご愛敬だが、その逆は大変なことになる。

浅間隠山から浅間山

短時間で下山できたので、富岡に移動して、世界遺産の「富岡製糸場」を訪問。入口が教科書で見た写真と同じだったので安心した。

２時間40分　4.9ｋｍ　累積標高差465m

荒船山（1423m）

・日　時：11月20日（日）

・天　候：曇り後小雨

荒船山は、その名のとおり、巨大な船のような山体が有名である。しかし、天気がすぐれず、楽しみにしていた艫岩が見られず、荒船らしくないのは残念。 全体に歩きやすく、岩場もそれほど難しくはない。艫岩は、怖くて端まで近寄れない。霧の中なのがかえって怖い。雨を気にして、先を急いだところ、下山直後、小雨となり飛ばして正解であった。

３時間50分　　9.3ｋｍ　累積標高差　713m

奈良・大阪の山々

2022年12月２日～５日

（会員　16315　佐藤裕之）

耳成山（139m）

・日　時：2022年12月２日（金）

・天　候：晴れ

大分を5:12に出発したところ、大和八木に15:25到着。大和三山の耳成山は、駅から20分程度なので、登ることにした。眺望は山頂からの一角から橿原方面が見えるのみだが、歩けば楽しい。

市街地に近く、高校生のブラバンの演奏が気持ちよく響いてくる。大和三山、ゆったりしてとても良い。

下山後、宿舎のある八木方面へ歩いていくと、想像もしていなかった古い町並みがある！ 八木札の辻の交流館（旧家を改造）を覗くと、閉館間際なのに、遠くから来たから、と丁寧に説明していただき、とても勉強になった。ありがとうございました。

43分　1.9ｋｍ　73m

音羽山・龍門岳（904m）

・日　時：12月３日（土）

・天　候：晴れ

大和の山　２日目

ホテルからタクシーで南音羽の登山口をめざす。登山道の途中に観音寺があるが、NHKの「やまと尼寺精進日記」の舞台である。たまたま来たわけだが、１度来てみたかったと、連れは大喜びだ。お参りし、ご住職とも言葉を交わして、先に進む。

登り始めの中腹の展望台からの眺望は良いが、後は延々と人工林の中を歩き、基本的に眺望はない。杉林の中を歩いていると、学生時代に、立木の持ち主の公示の方法として習った「明認方法」がある！ 明認方法は時々見かけるが、吉野のそれは、芸術的なのが多い。さすが、先進森林地域の吉野の山だ。（尺間山で、立木に「水」とマーキングされた明認方法を見たが、水場ではなく、おそらく、水田さんとかの所有を示すものであろう。勘違いして水場を探さないように。「飯」と書いてあれば、飯田さん？そこに食べ物はない！）

歩いても歩いても、ほとんど眺望はないが、山道自体は変化がある。そろそろ歩きに飽いたころ、下山口の吉野運動公園に到着した。今回、タクシーにしたので、北から南に縦走できて、満足である。レンタカーよりも安上がりだっただろう。

６時間40分　10ｋｍ　累積標高差　1120m

大和葛城山（959m）

・日　時：12月４日（日）

・天　候：晴れ

橿原市今井町から畝傍山（199m）に登り、橿原神宮に参拝してさらに大和葛城山めざして歩き、そのまま登頂するという壮大なプランを立てる。

まずは早朝、今井町の旧街並みを歩く。町並みがとにかく広い。これだけの規模の古い町並みは、少ないだろう。次に綏靖天皇陵と神武天皇陵にお参りする。歴史的にどうなのかは別として、神武天皇陵はさすがに森厳な趣だ。粛然とする。

次に畝傍山に登頂。大和三山２座目である。低山だが、面白い。さらに、橿原神宮に参拝。学生時代にお参りした記憶があるので、50年ぶりか？ 参拝を済ませて、大和葛城山への長い道を歩く。気分は、田中陽希氏になったようで、次第に昂揚してくる。古道調査で鍛えている（？）ので、平地をとぼとぼ歩くのも苦にならない。しかし、ここで昼食を食べながら、冷静に判断すると、このまま歩くと大和葛城山にたどり着くのが、真っ暗になりそうだ。これでは本末転倒である。潔くタクシーを呼び、葛城山ロープウエーで下車。ロープウエーは使わず、山頂目指し、スタート。一部急なところもあるが、概ね登りやすく、思ったより早く山頂に着くが霧の中で、何も見えない。

暗くなる前に葛城高原ロッジに到着。ゆっくり過ごす。御所方面の夜景が美しい。

翌朝、山頂に登ってみると、西側に大阪平野、東に奈良盆地が少しづつ明るくなって素晴らしい。山頂に泊まって正解であった。

８時間40分　累積標高差　1120m

大和葛城山頂から　朝の奈良盆地

金剛山（1125m）

・日　時：12月５日（月）

・天　候：曇り

朝飯を食べ、大和葛城山から金剛山に向けて縦走する。水越峠を経て渓谷コースをたどる。地図を見て最短ルートをたどったが、最短だけに金剛山にしては、難易度が高く、登山者が少ないようだ。山頂は神社のご神体で登ることはできない。ロープウエーは故障中のようだが、山頂広場には登山者は多い。テレビによく出てくる山頂広場で昼食。

金剛山の代表的ルートである千早本道を下るが、すさまじいばかりの木段の連続。楽しみにしていた千早城だが、楠木正成の攻防戦など見るべき解説に乏しく、がっかりした。昔から不思議に思う

のだが、なぜ楠木正成が大忠臣で、足利尊氏が日本史上最大の悪人なのか？現在の皇室は北朝系統なので、理屈から言えば、尊氏が忠臣で、正成は反逆者のはずだ。書けば、長くなるので、以下省略。

ちなみに大悪人（とされている）の足利尊氏は、めちゃいい人だったらしい。

５時間30分　9.7ｋｍ　登り　755m
下り　1180m

<参加者>　佐藤(裕)、佐藤(美)

大和葛城から金剛山

４．支部からの報告

支部連絡会議　京王プラザホテル　2022.12.3

令和４年度　支部連絡会議　報告
支部長　安東桂三（9193）
日　時：令和4（2022）年12月3日（土）
場　所：京王プラザホテル　4階　花C
テーマ：JAC会員の交流促進について

日本山岳会の支部連絡会議が、東京都新宿の京王プラザホテルで開催された。本部の柏澄子常務理事が、最近オンラインでの会議が続いていますが、今回はなるべく顔を合わせて開催したい、内容は「若手会員」「交流」をキーワードとしたいとのメールにて、支部連絡会議に日帰り参加してきました。ほとんどの支部から支部長が参加していた。

古野会長の開会あいさつは、日本山岳会の活性化のためには新人会員（若手）の獲得と定着が求められていることと、日本山岳会が他の山岳団体との違いは、全国に散らばる会員のネットワークと豊富な人材で、これらを有効に生かすことで他にない魅力を発揮したいとの事でした。

若手世代の活性化について、２題。

最初に、「ユース交流会について」。松原ユースクラブ委員会担当理事・委員長の松原さんより報告があった。2013年の劔岳合宿から始まり、2016年までは活動したが、一時途絶えていた。その後、2021年に本部青年部と広島支部ユースとで交流を再開し、現在に至ることを報告した。ただ、2022年11月のユース交流会で実施した天応烏帽子岩で事故が発生したが、事故を反省して、2023年度も交流会を行いたい、全国にある支部もその交流会に取り込みたいとまとめた。

次に「広島支部ユースの活動について」。広島支部吉村副支部長が、広島支部の二度の事故のことから説明を始めた。過去の二度の事故で、５名が亡くなり、支部の発展的解散も考えたが、本部の重廣さんらの応援で、解散せず、改革を行い、支部の運営を行っているとの事。事故のない支部にするために、４つのクラブを作った。そしてヒヤリハットと反省報告書の作成をし、報告の徹底をした。４つのクラブの内、ユースクラブは10名が35名に増えた。ユースクラブは、SNSで会員を募集し、天応烏帽子岩や三倉岳で、声掛けし、誘う。誘った新人には、フォロー役を就ける。指導部が登山計画書のチェックをし、ヒヤリハット報告書を必ず提出する。ユースクラブのメンバーには、アルパインクライマーになって欲しい。今後、リーダーを増やそう、自主独立した登山者になることを目標と述べた。

交流について、３題。

「山岳祭紹介と宮崎ウェストン祭について」。坂井副会長が全国の日本山岳会本部支部がかかわる山岳祭について紹介し、荒武宮崎支部長が、宮崎ウェストン祭の紹介をした。

「支部における交流の実際」。北海道井田事務局長が、北海道支部は、ルームを持っている、そこは一泊1000円で宿泊できる。そこには、JAC会員なら、誰でも宿泊できると言い、北九州支部の会員が訪れ、交流を持ったと紹介した。

「支部の保有する宿泊施設の紹介」。松田理事が報告する予定であったが、事情により坂井副会長が報告。全国には、７支部が宿泊施設を持っている。利用くださいとのこと。

その他、事務連絡など、３題。

「古道調査の進捗について」は近藤委員が報告。「来年度の事業計画の記載方法について」は長島理事。「その他、補助金申請など」で終わった。

質疑応答などがあり、短い時間だったが、連絡会議が終わった。

支部連絡会議に参加しての感想。

JACの問題は、高齢化した組織と会員減少、当支部も同じと思う。何か手を打たなければ、次第に衰退は間違いないと思う。広島支部の吉村副会長が言われたことは、重く受け止めたい。リーダーを一人でも多く、東九州支部の会員も自立した登山者となるように。また、事故にならないような山行、事故になったら、その被害を少しでも軽減するような能力を持つメンバーの養成、多くの課題があるが、対処したい。

会長、副会長、長島理事、東京多摩支部野口支部長、宮崎支部荒武支部長、北九州支部日向支部長、熊本支部土井支部長、福岡支部渡部事務局長、松原理事らと、少し話をした。特に松原理事には、広島の事故ことと、今後のことを、少し長く話しました。

年次晩餐会報告　　下川　智子（14505）

2022年12月３日、京王プラザホテルで開催された年次晩餐会に出席した。コロナ禍で３年ぶりの開催だったが全国から344人が集まった。晩餐会にさきだち、記念講演会が行われた。

講演会は午後１時から４部構成で、まずカナダ在住の会員山田利行さんの「6000m級の未踏ラインとファスト.マウンテニアリング」と題する講演が行われた。アマ.ダブラムのBCから山頂間の往復を９時間32分という世界最速タイムで成し遂げ、こうした登山スタイルを「ファスト.マウンテニアリング」と呼んでいると説明。「未踏ルートでの冒険的な挑戦と、スピードで自身の限界に迫る肉体的な挑戦」と語っていた。

新入会員紹介

権現山にて

次に広島支部の吉村千春副支部長が「若者たちへ受け継ぐヒマラヤ登山」と題して、広島支部25周年に合わせて行われたアマ.ダブラム登山について報告した。同じアマ.ダブラムでもスピードを競う山田さんの登り方と多くの登山者に巻き込まれ、自分たちの計画通りに動けなかった広島支部の報告にヒマラヤ登山の難しさを感じた。三番目に創立120周年記念事業「ヒマラヤキャンプ」の一環として行われたプンギへの挑戦を「未踏峰プンギへ 実践を通してわかったこと」と題して後藤希介会員、加々見太地会員、安達正貴会員から写真や動画を交えながらの報告があった。若く経験も浅い若者３人が高山病に苦しめられながらも自分たちの力で6000mを超えるヒマラヤの山に挑戦したことは素晴らしいと思った。

最後に今年の秩父宮記念山岳賞を受賞した新宮山彦ぐるーぷの沖崎吉信会員が、大峰南奥駈道での「千日刈峰行とその展開」と題する受賞記念講演を行った。吉野と熊野を結ぶ修験の道.大峰奥駈道を32年の長きにわたり補修、修復、宿の新築、建て替え、お堂、祠の整備など環境整備に力

を尽くしてきたグループの活動を報告した。会員の減少や高齢化に直面しながらもこれからも地道に活動を続けていきたいと話された。

午後５時晩餐会が始まった。各テーブルの上には百名山の名前のプレートが置かれており、東九州支部は「五竜岳」のテーブルに着席。今年はコロナ感染予防のため隣の人との間にアクリル板がたてられていて少し話しづらさを感じた。

初めに古野淳会長の挨拶があり、次に物故会員への黙祷、新永年会員紹介、新入会員の紹介に続き重廣恒夫会員の「グレートヒマラヤトラバース」についての報告があった。

前会長の小林政志さんの乾杯の挨拶のあと懇親会に移った。京王プラザホテルのスリーコースディナーは申し分なく美味だった。各テーブルに知人を見つけては話が弾みアッという間の３時間だった。

翌日の記念山行は神奈川県の弘法山（235m）と権現山（243m）に登った。鶴巻温泉駅に9:30集合。各支部ごとに班分けして登ることになったが東九州支部からは東京在住の佐藤さんと私の２人だけの参加だったので本部の山行委員会の班に加わった。

駅から緩やかな坂道を歩いていくとすぐに山道に入る。よく整備された道を上りあがると弘法山山頂手前からは雪を被った富士山が見えてきた。山頂には弘法大師像が祀られているお堂があった。そこから権現山までは気持ちの良い縦走路で富士山を見ながらの楽しい山歩きだった。権現山山頂で昼食。記念撮影のあと下山。下山して２時秦野駅で解散。新しい出会いもあり収穫の多い記念山行となった。

会　務　報　告

支部会議報告

第４回役員会　11月10日（木）
第５回役員会　１月10日（火）
第６回役員会　３月16日（火）
第７回役員会　４月13日（木）

支部ルーム開催状況

11月４日（金）
大分西部公民館　18:30から　２名
12月２日（金）　同上　４名
１月６日（金）　同上　３名
２月３日（金）　同上　９名
３月３日（金）　同上　６名
４月７日（金）　同上　11名

支部ルーム開催予定

５月12日（金）役員会と兼ねる
６月２日（金）

支部ルームは、会員全員のルームです。山行計画や、山行反省など活発な利用をお願い（支部長より）。

月例山行のご案内

４月16日（日）矢筈岳

担当　丹生浩司まで　090-1080-7623
あるいはメールで　hyakusho-jo-to-12.18@docomo.ne.jp

５月27日（土）米神山

担当　河野達也まで　090-9565-5478
あるいはメールで　kawanoty@nbu.ac.jp

６月11日（日）
御座ヶ岳（シニアトレッキング）

担当　笠井美世まで　090-1970-5068
あるいはメールで　mmykasai@nifty.com

７月	求菩堤山・犬ヶ岳
８月６日	九重山（慰霊祭）
９月	貫　山
10月	みそこぶし（シニアトレッキング）
11月	尾鈴山
12月	忘年登山
１月	鞍　岳
２月	天　山
３月	黒　岳
４月	五葉岳

月例山行の担当者を役員に限らず、会員のどなたでも出来ます。
ぜひ協力を願いします。（支部長より）

第10期登山入門教室のお知らせ

第１回	５月25日（木）	ホルトホール
第２回	５月28日（日）	鶴見岳
第３回	９月13日（水）	ホルトホール
第４回	10月29日（日）	みそこぶし山
第５回	11月19日（日）	津波戸山
第６回	１月13日（土）～14日（日）	くじゅう連山

担当　佐藤裕之まで　090-5198-8204
あるいはメールで　sa10h@mail.goo.ne.jp

日本山岳会東九州支部総会の案内

４月22日　17時から
大分市コンパルホール　４階　視聴覚室
総会時に支部会費お願いします（担当より）

2023年度
支部研修（予定　概略）

研修登山
　小表山　2023年４月１日（土）
　終了しました
月例山行（研修山行と兼ねる）
　米神山　2023年５月27日（土）
月例山行
　シニアトレッキング（研修山行と兼ねる）
　御座ヶ岳　2023年６月11日（日）
登山講習会（研修山行と兼ねる）
　西叡山の山麓　2023年７月１日（土）
登山講習会（研修山行と兼ねる）
　石鎚神社の岩　2023年９月２日（土）
研修登山
　皿内城山　2023年10月１日（日）
登山講習会（研修山行と兼ねる）
　アイゼンワーク　2023年11月12日（日）

問い合わせ　安東桂三　090-5727-9472

2023年度
登山講習会（予定　概略）

実施期間　2023年７月から2024年１月まで
　　５回実施。
募集対象　一般公募　及び
　　日本山岳会東九州支部会員

2023年７月１日（土）
　読　図（基礎編）
　西叡山の山麓（豊後高田市）
８月19日（土）
　沢登り（実践編）
　神原川本谷　あるいは
　小鳥谷（豊後竹田市）
９月２日（土）
　クライミング（基礎編）
　石鎚神社の岩（日出町）

11月12日（日）
　アイゼンワーク（基礎編）
　恵比須岩（別府市）あるいは
　高崎山（大分市）
2024年１月６日（土）～８日（祭）
　積雪期登山（基礎編）
　大万木山（島根県飯南町）

問い合わせ　安東桂三　090-5727-9472

九州５支部集会・山の安全を祈る集い（予定　概略）お知らせ

2023年８月５日
　九州５支部集会 14時から　法華院温泉山荘
　記念講演　加藤英彦顧問　松田宏也本部理事
６日
　山の安全を祈る集い
　池の小屋上の慰霊碑　11時から　集い

総会後に詳細お知らせします。（担当より）

後記

　支部報を担当して今回が２号目となりましたが、今回も多くの方にご迷惑をお掛けすることになり、先ずはお詫びを申し上げます。

　記念すべき第100号は偉大な先人方から特別投稿をいただき、それを中心に編集を行いました。記念投稿を拝読した感想は今後、私が何十年努力しても先人方の域には到底たどり着けないこと、また編集は、作業を行えば行うほどこれまで支部報を担当してこられた前任者の偉大さが身に染みました。

　今後の支部報は、これまで以上に支部の構成員全員で作り上げられればと漠然と思っています。山で感動したことや支部の構成員全員で情報共有したい情報等、多くの方に投稿いただき、支部報として纏めていきたいと考えております。原稿を書くことが不得意な方は長文でなく「これだけは伝えたい」という部分のみでも結構ですし、手書きの原稿も郵送で大丈夫です。

　偉大な先人方に到底及ばない中、支部報編集作業の試行錯誤は続いていくと思います。編集者の至らない点を数で勝負ではありませんが、何卒、皆様方のお知恵・お力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。T.K

公益社団法人日本山岳会東九州支部
東 九 州 支 部 報　第100号
2023年（令和５年）１月25日発行

発 行 者　安 東 桂 三
編 集 者　河 野 達 也
印 刷 所　三和印刷出版㈱
発 行 所　事　務　局
〒870-1113　大分市中判田15-55　阿南方
TEL・FAX　097-597-7120
E-mail　beca5844@oct-net.ne.jp